

ケアと行為者性

対馬大気（東京大学大学院総合文化研究科 科学史・科学哲学研究室 修士二年）

我々が行為するとき、そこで起こっているのはどのようなことだろうか。一つの考え方は次のようなものだろう。行為とは、適切な欲求と信念のペアによって引き起こされた身体動作のことである。たとえば、ある行為者が「電気を点けたい」という欲求と「スイッチを入れれば電気が点くだろう」という信念をもつとする。この欲求と信念のペアがスイッチを入れる身体動作を引き起こすとき、その身体動作は行為であり、我々が為す何事かである。

しかしこの考え方は、人間の行為者性を十全に捉えていないように思われる。とりわけこのモデルは、我々の行為者性が帯びる、以下の二つの性質を取りこぼしているように見える。

- ① 規範性：我々は、自分が欲することを無反省に実行するわけではない。むしろ、自分はそれを為すべきか／為す理由があるかを考慮し、その考慮に照らして行為を制御する。
- ② 通時性：我々は、そのときたまたま欲することを行き当たりばつりに実行するわけではない。むしろ、自分自身を時間的な幅をもった存在者と見なし、自分の行為に通時的な一貫性を与える。

本発表では、これらの二側面を支えるものとして、ケア——何かを「大切にする」という心的態度——に注目したい¹。本発表の目標は、ケア概念に適切な分析を与え、それを通じて、行為者性の理解におけるケア概念の重要性を示すことである。

本発表は二部構成で行う。前半部では、ケアが何であるのかを解明する。つまり、ケア概念の積極的な特徴づけを試みる。発表者が擁護する分析によれば、対象 X を大切にすることの本質は、X を感情及び行為の理由の源泉と見なすことに存する²。すなわち、X を大切にする人は、X に関連する事実に応答して、一方では感情的影響を被り、他方では一定の仕方で行う。このとき、行為者の様々な感情と行為は、X を中心として通時的に組織化される。

後半部では、ケアが何でないのかを解明する。つまり、ケア概念の消極的な特徴づけを試みる。ケアは、①欲求、②価値判断、③意図及び方針と区別される。もちろん、ケアはこれらの態度と無関係ではない。むしろ、多くの欲求はケアによって産出され、多くの価値判断はケアと整合的であり、そして多くの意図や方針は、ケアを行為に反映させるのに役立つ。しかし、ケアによって担われる機能を、これらの態度が代わりに担うことはできない。

最後に、以上の分析を踏まえて、「ケア概念を導入する行為理論は、規範性と通時性を帯びた行為者性をうまく捉えている点で有力である」と結論される。

¹ 分析行為論におけるケア概念の重要性を指摘した先駆的論文として、以下を参照。Frankfurt, H. G. 1982. "The Importance of What We Care about" *Synthese*, 53/2: 257-272.

² この分析は以下に負う。Seidman, J. 2009. "Valuing and Caring" *Theoria*, 75/4: 272-303.